

組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成19年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	：	心理学研究者の統合的養成プログラム
機関名	：	上智大学
主たる研究科・専攻等	：	総合人間科学研究科心理学専攻
取組代表者名	：	黒川 由紀子
キーワード	：	臨床心理学、教育心理学、実験心理学、生涯発達、地域援助

I. 研究科・専攻の概要・目的

キリスト教ヒューマニズムを基本とし、真実と価値を追求する大学として1913年に設立された上智大学は、1966年4月に大学院文学研究科教育学専攻心理学コース修士課程・博士課程を開設して心理学の実践家と研究者の養成を開始した。その後、2005年4月に文学研究科から分離独立する形で総合人間科学研究科を新設し、大学全体としての教育理念の実現、すなわち、一人ひとりの人間を大切にす精神、人間の尊厳（ヒューマン・ディグニティ）を重視する精神を育み、全世界の平和に貢献しう学問研究や教育を行う人材の養成をめざすこととなった。

総合人間科学研究科心理学専攻は、同じ研究科に属する教育学専攻、社会学専攻、社会福祉学専攻とともに、1) 科学の知、2) 臨床の知、3) 政策・運営の知の創造を教育理念とし、行動し実践する研究者を養成しようとするものである。

心理学とは、人間行動と人間理解についての知識を高め、それによって人類の福祉に貢献しようとする科学である。この学問は基盤こそ共通しているが、医学でいえば基礎医学にあたる基礎心理学系の諸領域と、臨床医学にあたる臨床心理学系の諸領域に分けられ、それぞれに固有の対象と方法をもって発展してきた。その双方を学ぶことができる本専攻は、教育学専攻心理学コースを前身とした開設当初から、研究能力をもつ心理専門職を社会へと輩出してきた。本専攻では、今後もサイエンスとヒューマニズムを統合して人類の福祉に寄与する高度の専門家を養成していく。

博士前期課程では心理学の研究能力の基礎を養い、将来心理専門職として活躍するための実践的なトレーニングを行う。2001年度に開設した臨床心理学コースは、(財)日本臨床心理士資格認定協会の第1種指定大学院となっている。このコースでは、臨床心理士になるための教育訓練を行う。

博士後期課程では専攻領域における研究能力を高め、あわせて将来、研究者あるいは指導的心理専門職として自立するための高度な実践的トレーニングを行う。博士論文の審査申請にあたっては、学術雑誌に掲載または受理された複数の研究論文があり、博士論文の構想を構想発表会で発表することが明確に義務づけられている。

臨床心理学コースでは大学付属の施設「上智大学臨床心理相談室」において、大学院生の訓練が行われる。この施設は学外からの相談を受け入れるとともに、臨床心理学を専攻する大学院生の実習・訓練を行う。本専攻では、心理学の「基礎」領域と「臨床」領域を専門とする教員がバランスよく配置されており、双方を幅広く学ぶことができることが最大の特徴である。現在、教員は11名おり、それぞれが異なる分野を専攻する。すなわち基礎系心理学分野として、生理心理学、認知心理学、学習心理学、社会心理学、発達心理学をそれぞれ専門とする教員5名、臨床系心理学分野として、臨床心理学、カウンセリング心理学、精神分析学、老年心理学、コミュニティ心理学、人格心理学をそれぞれ専門とする教員6名が在任する。修士課程では各学年平均して5名の基礎系大学院生、15名の臨床系大学院生が学んでいる。博士課程修了生の多くは公的機関や医療・教育関連機関のカウンセラー、セラピストなど心理臨床職として活躍しており、修了生の職場で実習を行うなど、大きなヒューマン・ネットワークの中で研鑽を積むことが可能である。

II. 教育プログラムの概要と特色

(1) 学部からの一貫した教育：

内部の大学院進学率は、博士前期課程では4年次在学者の約30%と抜群に高く、学部1年次から専門が分かれている本学の特徴を活かして、実質的に1年から大学院博士前期課程までの6年間ないし博士後期課程までの9年間の一貫教育として位置づけ、学部での基礎的トレーニングを踏まえて、大学院での統合的教育を行う。

(2) 基礎と臨床の両面からの教育：

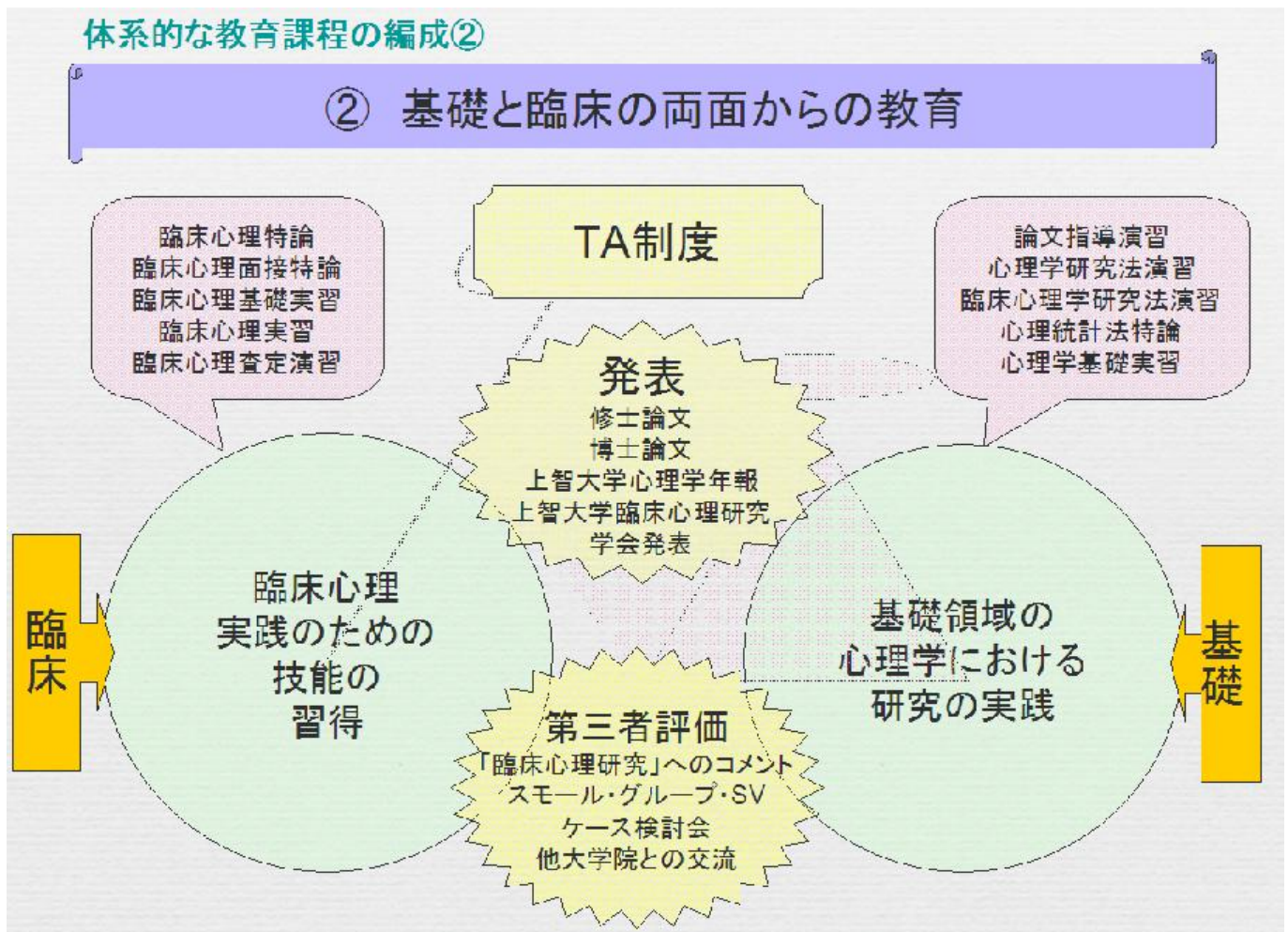
心理学の基礎領域と臨床領域を車の両輪として、博士前期課程においては、**基礎・実験系心理学、社会・発達系心理学、臨床系心理学**のそれぞれにかかわる共通科目の履修と、それぞれに特化した科目群の履修を通し、基礎と臨床の両面からの指導を行う。

(3) 臨床的視点をもつ研究者、研究者の視点をもつ実践家の養成：

今日、私たちを取り巻く社会的な問題の多くは、研究に根ざした問題解決の追究と実践的なニーズの把握、支援的アプローチの模索を必要としている。

博士後期課程においては、それぞれの専門のテーマの追究とともに**対人支援**をテーマとした共同研究プロジェクトの実施により、**チームアプローチ**を通して、行動できる心理学者の養成を目指す。

図1. 履修指導および研究指導の概念図



III. 教育プログラムの実施結果

1. 教育プログラムの実施による大学院教育の改善・充実について

(1) 教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

上記IIの(1) (2) (3) で述べたとおり、学部から大学院にわたる統合的教育を推進するために基礎領域と臨床領域を両輪とした教育研究活動を実施し、臨床的視点を持つ研究者、研究者の視点を持つ実践家を養成するのが本プログラムの目的である。この課題を実現するために、以下のような活動を実施した。活動の内容は以下のAからEまでの5つのカテゴリに整理した。

- カテゴリ A：大学院生からの公募による研究プロジェクト支援
- カテゴリ B：大学院生の海外研究活動のための支援
- カテゴリ C：大学院生の国内研究活動のための支援
- カテゴリ D：大学院生の研修会等への参加の支援
- カテゴリ E：専攻によるシンポジウム、講演会等の開催

各カテゴリの実施による成果をまず以下にまとめ、それに続いて実際に実施した活動内容を説明する。

カテゴリ A：

年間 5 件程度の応募を予測していたが、2008 年度が 6 件、2009 年にはさらに倍増して 14 件と、積極的な応募があった。後述するように、研究プロジェクトの公募は絶大な教育的効果があった。第 1 に、研究計画をきちんと文書にする訓練となった。第 2 に、自ら予算の使途を考えることで、独立した研究者としてのマネージメント技術を学ぶことができた。このようにして大学院生を研究者として育てるための基幹作りができた。

カテゴリ B：

海外学会で口頭発表する経験が増えたことによって、大学院生の語学力と研究に対する意識が向上した。研究の最先端を学び、かつ国際的に研究者ネットワークを構築するという、研究者として最も必要な基礎を身につけさせることができた。

カテゴリ C：

国内学会等で積極的に発表を行うことで、大学院生は他分野も含めた多くの研究者から建設的な批評を受けた。これにより、研究室での研究だけでは得られない多くの示唆を得、複眼的な視点を持つことができた。

カテゴリ D：

事例が数多く学べる研修会を通して最前線の知識を吸収し、「臨床的視点を持つ研究者、研究者の視点を持つ実践家」を育成する重要なきっかけとなった。

カテゴリ E：

多彩な内容の講演会を実施したことにより、大学院生は新たな学問的視点に接し、「統合的」教育という本企画の主旨に合致した教育的効果があった。シンポジウムや講演会等では、普段直接会うことが難しい一線級の研究者を招聘した。大学院生は、彼らと対話することで研究者としての在り方や、これからの研究の進め方についてアドバイスを得ることができた。

カテゴリ F： その他

ナザレ大学との共同研究においては、「海外大学との連携」という大学院生にとってはほとんど経験の無い試みを行い、大学院生の素養をさらに発展させることができた。参加者からは「非常に貴重な体験だった」といった意見も出ており、継続にも充分期待が持てるプロジェクトとなった。

また、GP の活動が大学院生の刺激となった一例として、領域横断的な研究会が自主的に組織されたことがあげられる。これは「紀尾井心理科学研究会」といい、一ヶ月に一回程度夕方に開催され、1-2 名の講演者が自分の研究を詳細にプレゼンテーションし、質疑応答を行うものである。参加者の大学院生は基礎系・臨床系の両方を含み、現在でも活発な活動が行われている。GP が開始されるまでは、他の研究室の大学院生同士が交流する機会はまれであった。このように、GP 企画の実施は大学院の雰囲気を一変し、大学院教育の改善・充実におおいに貢献した。

それでは、実際に実施した活動内容について年度別の活動成果を記述する。

2007 年度

A：研究プロジェクト

補助金の交付決定が 2007 年 11 月だったため、公募の時間的余裕がなく実施していない。

B：海外研究活動等

- 1 韓国・ナザレ大学との共同研究の打ち合わせのため、教員 1 名が大学院生 8 名を引率して、韓国へ出張した（2007 年 12 月 27 日から 29 日）。

写真 1. ナザレ大学訪問



2 学習・記憶・認知に関する国際シンポジウムに参加するため、教員 1 名が大学院生 3 名を引率してスペイン（バレンシア）へ出張した（2008 年 2 月 9 日から 14 日）。

3 American Counseling Association の学会に参加するため、教員 1 名が大学院生 14 名を引率してアメリカ合衆国（ハワイ）へ出張した（2008 年 3 月 27 日から 31 日）。

C：国内研究活動

第 26 回日本基礎心理学会を上智大学で開催し、その内容の一部を本プログラムとの共催とした（以下 E2 を参照）。

D：研修会等

ユング研究所の視察と共同研究打ち合わせのため、PD1 名がスイス(チューリヒ)へ出張した（2008 年 2 月 23 日から 3 月 2 日）。

E：シンポジウム、講演会等

1 文部科学省海外研究者招聘事業で日本を訪問中（受け入れ先機関は上智大学）であったトロムソ大学（ノルウェイ）の Bruno Laeng 教授が「ヨーロッパの大学院における心理学教育」という題目で、教育的講演を行った（2007 年 12 月 3 日）。

2 日本基礎心理学会（上智大学主催）の招待講演者として日本訪問中の南カリフォルニア大学（アメリカ）の Zhon-Lin Lu 教授が「注意のメカニズム：その心理物理学、認知心理学、認知神経科学」という学術講演を行った（2007 年 12 月 8 日）。

写真 2. Bruno Laeng 教授講演会



2008 年度

A：研究プロジェクト

1 「ポジティブな心的機能の役割」（社会心理学研究室・伊澤冬子）

- 2 「障害児の発達支援」(発達心理学研究室・早川貴子)
- 3 「メトロンがラット海馬長期増強に及ぼす抑制効果」(生理心理学研究室・高橋良幸)
- 4 「慢性疾患と共に生きる患者の家族を含めたサポート」(精神医学研究室・水野泰尚)
- 5 「自己認識と他者知識のリンクに関する実験的研究」(社会心理学研究室・石井辰典)
- 6 「PE (長時間暴露法) を使用できる臨床家の養成 (集中講座)」(臨床心理学研究室・齋藤梓)

B : 海外研究活動

- 1 国際心理学会 (研究発表) / 認知心理学研究室・テイウィット香央 7/19-26 (ドイツ)
- 2 Psychonomics Society 大会サテライト (研究発表) / 認知心理学研究室・山岡香央 11/13-16 (シカゴ)
- 3 Gerontology Society of America 大会 (研究発表) / 老年心理学研究室 北山純 11/21-25 (ワシントン)

写真 3. 国際心理学会の会場 (ベルリン)



C : 国内研究活動

- | | | | | | |
|---|-----------|------|----------|----------|-----------------|
| 1 | 日本心理学会 | 研究発表 | 社会心理学研究室 | 石井辰典 | 9/19-21 (札幌) |
| 2 | 精神分析学会 | 研究発表 | 精神医学研究室 | 鈴木菜実子 | 10/31-11/2 (博多) |
| 3 | 社会心理学会 | 研究発表 | 社会心理学研究室 | 石井辰典 | 11/2-4 (鹿児島) |
| 4 | 社会心理学会 | 研究発表 | 社会心理学研究室 | 伊澤冬子 他2名 | 11/2-4 (鹿児島) |
| 5 | 基礎心理学会 | 研究発表 | 認知心理学研究室 | 菊池 健 他2名 | 12/6-7 (仙台) |
| 6 | 子ども虐待防止学会 | 研究発表 | 臨床心理学研究室 | 林 裕美 | 12/13-14 (広島) |
| 7 | 基礎心理学会 | 研究発表 | 生理心理学研究室 | 高橋良幸 | 12/6-7 (仙台) |
| 8 | 動物心理学会 | 研究発表 | 生理心理学研究室 | 高橋良幸 | 9/13-15 (水戸) |

D : 研修会等

- | | | | | |
|---|--------------|----------|----------|--------------|
| 1 | MRI 解析入門 | 認知心理学研究室 | 長田今日子 | 7/8-8/1 (岡崎) |
| 2 | ファシリテーター養成講座 | 臨床心理学研究室 | 林 裕美 | 7/3-8 (東京) |
| 3 | DN- CAS | 発達心理学研究室 | 和泉怜実 他1名 | 8/30-31 (大阪) |
| 4 | WISC-III | 発達心理学研究室 | 若杉 肇 他1名 | 9/27-28 (東京) |
| 5 | 新版 K 式 | 発達心理学研究室 | 早川貴子 | 11月 (京都) |

E : シンポジウム、講演会等

- 1 Dr. D. Lier 講演会 企画者：臨床心理学研究室 横山恭子教授 5/13-15 (上智)
講演者： Dr. Doris Lier (Training Analyst, A Member of Office Committee of International School of Analytical Psychology, Zurich)
指定討論：中山茂樹教授 (千葉大学大学院工学研究科)
演題： Psychological Reflection upon Contemporary Architecture
(邦題：現代建築にみられる“心”のはたらき)

写真 4. Dr. D. Lier



- 2 Dr. Kim Hye-Kyung 講演会 企画者：コミュニティ心理学研究室 久田満教授 10/18-20 (上智)
 講演者：Dr. Kim Hye-Kyung (Associate Professor in Social Gerontology
 Korea Nazarene University, South Korea)
 演題：高齢者の対人関係と Quality of Life

写真 5. Kim 教授講演会



2009 年度

A：研究プロジェクト

- 1 精神分析並びに精神分析的心理療法の効果研究に関する方法論
 (精神医学研究室 鈴木 菜実子)
- 2 アスペルger症候群における時間と対象関係 (精神医学研究室 稲垣 綾子)
- 3 メatonin分泌リズムと学習成績の日内変動に関する行動学的実験
 (生理心理学研究室 高橋 良幸)
- 4 ステレオタイプとバイアスに関する研究 (社会心理学研究室 河野 周)
- 5 ネガティブな被養育経験の世代間伝達の防止に関する研究 (臨床心理学研究室 林 裕美)
- 6 楽観性が心理的適応に及ぼす影響 (社会心理学研究室 伊澤 冬子)
- 7 カテゴリの形成が視知覚に及ぼす影響とそのメカニズム (認知心理学研究室 末神 翔)
- 8 自傷行為のメカニズムの解明 (精神医学研究室 山田 聡子)
- 9 統合失調症をもつ患者の家族へのサポート (精神医学研究室 水野 泰尚)
- 10 企業組織におけるラインと心理職のコラボレーションによる復職支援モデルの構築
 (コミュニティ心理学研究室 隅谷 倫子)
- 11 発達検査および発達障害児の支援に関する研究
 (発達心理学研究室 西中村 仁美他 2名)
- 12 大学生における心理専門職に対する援助要請 (コミュニティ心理学研究室 内堀 麻美他 4名)

B : 海外研究活動

- 1 Psychonomics Society 大会サテライト (研究発表) 認知心理学研究室 飯田 倫崇
11/19-22 (ボストン)
- 2 Gerontology Society of America 大会 (研究発表) 老年認知心理学研究室 北山 純
11/18-22 (アトランタ)

C : 国内研究活動

- 1 国際生理学会 研究発表 生理心理学研究室 高橋 良幸 7/27-8/1 (京都)
- 2 動物心理学会 研究発表 生理心理学研究室 高橋 良幸 9/25-9/27 (岐阜)
- 3 社会心理学会 研究発表 社会心理学研究室 河野 周 10/9-12 (大阪)
- 4 パーソナリティ心理学会 研究発表 社会心理学研究室 河野 周 11/28-29 (倉敷)
- 5 パーソナリティ心理学会 研究発表 学習心理学研究室 長谷川由加子 11/28-29 (倉敷)
- 6 海馬と高次脳機能学会 研究発表 生理心理学研究室 高橋 良幸 11/21-22 (金沢)
- 7 基礎心理学会 研究発表 認知心理学研究室 末神 翔 12/5-6 (東京)
- 8 基礎心理学会 研究発表 生理心理学研究室 高橋 良幸 12/5-6 (東京)
- 9 発達心理学会 研究発表 発達心理学研究室 早川 貴子 3/23-25 (神戸)

D : 研修会参加

- 1 新版 K 式発達心理学研究室 西中村仁美 他 1 名 10/23-25 (京都)
- 2 感覚統合セミナー 発達心理学研究室 早川 貴子 11/20-22 (京都)
- 3 KJ 法 臨床心理学研究室 稲村加奈子 1 月 (東京)

E : シンポジウム、講演会

- 1 Dr. J.B.Hellige 講演会 企画者：認知心理学研究室 道又 爾 4/26-5/1 (上智)
講演者： Dr. Joseph. B. Hellige (ロヨラ・マリーマウント大学副学長)
演題：21 世紀の大学院教育
- 2 B.McWhirter、E.McWhirter 先生招聘による合宿研修
企画者：カウンセリング心理学研究室 クスマノ・ジェリー教授 5/21-25
- 3 D.Lier 講演会 企画者：臨床心理学研究室 横山 恭子教授 11/30-12/1 (上智)
- 4 GP 終了企画 企画者：老年心理学 黒川由紀子教授 2/23 (上智)
午前：大学院生による活動成果のポスター発表
午後：シンポジウム「心的現象の理解とは何か—心理学における基礎と臨床のコラボレーションに向けた対話」
シンポジスト：道又爾「科学と心的現象」
岡田隆「生理心理学における心的現象理解」
藤山直樹「精神分析における心的現象理解」
コメンテータ：福岡伸一 (青山学院大学理工学部生命科学科教授)

写真 6. シンポジウムのようす (1)



写真 7. シンポジウムのようす (2)



写真 8. ポスター発表会



F : 共同研究

韓国ナザレ大学 (金恵京先生) と 〈A-12 と同一〉コミュニティ心理学研究室 久田 満
他 院生 4 名 10/18-20

2. 教育プログラムの成果について

(1) 教育プログラムの実施により成果が得られたか

上記の活動によって大学院生の学問的視野は確実に広がり、研究者としての自覚がおおいに高まった。特に、研究プロジェクトの公募は絶大な効果があった。第1に、公募書式を日本学術振興会特別研究員 DC1 の書式に準じ、自分の研究を整理して他者にも分かりやすく説明を行えるよう試みた。研究者という位置から自分の専攻内容を説明する事で、研究者としての自覚が高まった。実際に、特別研究員への応募者も増えた。第2に、自ら予算の使途を考えることで、独立した研究者としてのマネージメント技術を学ぶことができた。

学会参加も非常に増え、特に進んで海外学会で発表する経験を積む院生が増えたことによって専攻全体の雰囲気も、国際的視点で自分の研究テーマを考える習慣が身につく等大いに活性化した。また、上述のような多彩な講演会を実施したことにより、大学院生は普段ふれることのない学問的視点に接することができ、「統合的」教育という本企画の主旨に合致した教育的効果があった。

特に、2010年2月に行われたシンポジウムは、本企画の最後を飾るにふさわしい斬新な内容のものであり、参加した大学院生たちに強い知的刺激を与えた。

まず、第1シンポジストが心的現象を科学的に研究するという問題と困難さを大局的に論じた。次に第2シンポジストが、生理心理学の視点から研究の最終的な目標や、いわゆる「意識のハードプロブレム」の問題を論じた。さらに第3シンポジストが精神分析の視点から、人間の「語り」の意味について臨床例を引きつつ詳細に論じた。

最後に、気鋭の分子生物学者であり、きわめて広い視点から生命と科学についての多くの著書を出版しているコメンテータが、生命体の本質とその研究の実際について語り、3人のシンポジストの提起した問題を「生命」の理解として統合する視点を提示した。質疑応答では時間が足りなくなるほどの質問が大学院生から相次ぎ、非常に刺激的な体験となった。

以上のように、教育プログラムは着実に実施され、大学院教育の改善・充実におおいに貢献した。予想をはるかに超えた成果を上げたと言える。

また、定量的なデータとしては、以下の2点が挙げられる。第1に、大学院生をリサーチアシスタント(RA)として雇用できるようになった。〈資料 大学院学生の動向等〉にあるとおり、プログラム実施前にはRAは0人だったのが、プログラム開始後は、2007年度に5人、2008年度に8人、2009年度に12人のRAが雇用された。これにより、大学院生は安定した身分・環境で研究に専念できるようになった。

第2に、学会発表数が2006年度の22件(うち海外1件)から、2007年度には24件(うち海外5件)、2008年度には29件(うち海外7件)、2009年度には39件(うち海外5件)と、特に海外発表数が劇的に向上した。これによって大学院生の視野は国際化され、最新の研究知見を広く取り入れて研究に活かすことができるようになった。

3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

(1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

今後の課題としては、大学院生のさらなる国際化を達成するために、充実した語学(英語)指導を恒常化することがあげられる。これまでは指導教員が個別に行ってきた発表ポスターの作成、研究内容を口頭で誤解なく説明する技術、英語による研究論文の作成技術などを、大学院教育の中に明確に位置づけて組織的な教育を行う必要がある。第2に、研究の内容自体が国際的評価に耐えられる水準を常に保つために、教員と大学院生が常に国際学会等に参加し、最新の研究情報を摂取する必要がある。

また、本学のFD活動は、かつては学部・研究科がそれぞれ独自の工夫のもとに取り組んできたが、2006年9月1日のFD委員会規程制定とともに徐々に全学的規模のプログラムが付加され、現在では体系的な取り組みに進化しつつある。FD委員会ではさらに積極的な活動を展開するための委員会構成の見直しや、年間FDプログラムの作成など新しい試みに取り組んでいる。今後とも、

各学部・研究科で実施している FD 活動と連携をとりながら、活動を推進していくことになっている。

現在、本学の FD 活動は非常に活発である。たとえば 2009 年度には 6 回の講演会が開催され、毎年必ず新任教員の研究会が実施される。さらに全学共通科目については詳細なアンケート調査が実施され、その結果は常に大学ホームページ上で公開されている。アンケート結果を見ると、学生の授業に対する評価は非常に高い。たとえば 2009 年度秋学期の結果では、「総合的に判断して授業に満足したか」という問いに対して回答者の 45.6%が「そう思う」と回答している。「どちらかといえばそう思う」と回答した 33.4%を加えると、79.0%の学生が授業に満足していることを示している。これに加え、2010 年度は 3 件の授業支援プログラムが実施され、学生のニーズに合わせた教育支援体制の改善が常に行われている。

4. 社会への情報提供

(1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

①ホームページについて：

本企画のための専用の URL を取得し、ネット上で活動実績を随時更新するとともに、大学院生が企画へ応募するための情報を随時掲載した。この URL を機会のあるごとに様々な心理学関係者、機関に伝えることで、必要な情報はすべて社会全体へと提供されている。また大学のホームページからリンクを張ってあるため、大学内外から簡便に情報を参照できる。

(以下にホームページのスナップショットを掲載)

②活動報告書について：

各年度が終了するごとに紙媒体の活動報告書を作成し、同様の内容をネット上で公開した。紙媒体の報告書は、国費での作成であることを念頭に置き、華美なデザイン等は極力避けて簡素な形式とした。

③その他：

公開の講演会、シンポジウム等では、案内ポスターを学内に掲示するとともに大学各部署および学外の機関へ送付して広く周知をはかった。①ホームページも併用し、これらの方策により、本企画の情報は多様な方法によって積極的に公表された。

図 2. ホームページのスナップショット

上智大学総合人間科学研究科
心理学大学院GP
Sophia University Psychology Graduate Program GP

心理学研究者の
統合的養成プログラムについて

心理学大学院GPトップ > 文部科学省特色ある大学教育支援プログラム

社会のさまざまな問題に対応した
“こころの専門家”を育成

キリスト教ヒューマニズムを基底とし、真実と価値を追求する共同体として1913年に設立された上智大学は、1966年4月に大学院文学研究科教育学専攻心理学コース修士課程・博士課程を開講して心理学の実践家と研究者の養成をスタートさせた。そして、2005年4月、文学研究科から分離独立する形で総合人間科学研究科を新設し、大学全体としての教育理念の実現、すなわち、一人ひとりの人間を大切にす精神、人間の尊厳(ヒューマン・ディグニティ)を重視する精神を育み、全世界の平和に貢献する学問研究や教育を行う人材の養成をめざす

ごあいさつ →

心理学研究者の
統合的養成プログラムについて →

2009年度活動計画 →

活動記録 →

心理学科のご案内(大学) →

心理学専攻のご案内(大学院) →

お問い合わせ →

5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

(1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

平成 19 年度～平成 21 年度にかけて実施してきた心理学専攻 G P は、上智大学全体がグランド・レイアウト構想で取り組んでいる「世界に並び立つ大学」への発展と、「グローバル 30」採択によるさらなる国際化という方向性に合致した、きわめてすぐれた教育・研究上の成果を上げてきた。

具体的には、上述のように国内外の研究者の招聘と講演会等の実施、大学院生の国内外の学会での研究発表の援助などの事業を進めることで研究の水準は大きく向上し、国際的なネットワークの構築等、活動がグローバルな広がりを持った。その波及効果はめざましいものであった。

(2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

G P の成果を継承・発展させるため、2010 年度も引き続き国内外の研究者を招聘して講演会やワークショップ等を実施し、大学院生の国内外での学会発表を奨励・援助し、教育研究環境のさらなる国際化と充実をめざす。

また、さらに 2010 年度以降も同様の取り組みを持続することにより、心理学専攻の教育研究の水準は国内の大学院としては他に類例を見ない水準まで充実・国際化されると考えられる。このような恒常的な展開のために、教育研究環境のさらなる国際化と充実をめざし、2010 年度に大学は心理学専攻に対して以下のような特別予算を承認した。また 2011 年度以降も毎年 100 万円程度の継続的支出を見込んでいる。

(2010 年度心理学専攻特別予算)

消耗品費	20 千円
機器備品費	1,208 千円
他の委託費	70 千円
招聘旅費	218 千円
研究旅費	140 千円
一般旅費	340 千円
諸会費	60 千円
報酬料金（講演謝金）	80 千円
アルバイト謝金	78 千円
総額：	2,214 千円（支出）

組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

【総合評価】
<p> <input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない </p>
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>本プログラムでは、教育プログラムの目的に沿って、5つのカテゴリからなる活動計画、すなわち「大学院生からの公募による研究プロジェクト支援」、「大学院生の海外研究活動の支援」、「大学院生の国内研究活動の支援」、「大学院生の研修会等への参加の支援」、「専攻によるシンポジウム、講演会等の開催」などの計画が実施され、大学院教育の改善・充実に貢献している。大学院生の視野が広がり、自らの研究を国際的視点で見つめようとする姿勢が芽生え始め、学会発表数も着実に増加しており、成果が得られている。</p> <p>情報提供については、本プログラム専用のホームページ、活動報告書、その他講演会案内、シンポジウム案内などの多様な手法により、広く社会に公表されている。</p> <p>大学教育に果たした役割、波及効果については、5つのカテゴリを組み合わせることで、研究の水準が向上し、国際的なネットワークの構築等、活動がグローバルな広がりをもつようになり、一定の波及効果が期待される。また、本プログラムを支援期間終了後も展開していくための予算を計上するなど、大学による措置も示されている。</p> <p>留意事項への対応については、臨床心理分野と基礎的な実証的心理学との関係、経費面の精査など、求められた留意事項について概ね適切な対応がとられている。設備備品費の金額が当初計画を上回ってはいるが、教育研究経費は、ある程度効率的・効果的に使用されている。</p> <p>今後は、大学院生の一層の国際化を達成するため、英語による発表、ポスターの作成、口頭で説明する技術、研究論文の作成などを押し進めることにより、さらなる発展が期待される。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>大学院生の視野が広がり、自らの研究を国際的視点で見つめようとする姿勢が芽生え始め、学会発表数も着実に増加していることは、臨床的視点をもつ研究者、研究者の視点をもつ実践家の養成の教育モデルとして評価できる。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>大学院生の一層の国際化を達成するために、英語による発表、ポスターの作成、口頭で説明する技術、研究論文の作成などを押し進めることについては、具体化に向け、更なる検討が望まれる。</p>